

協同を通して思考を促す幼児教育のカリキュラム・マネジメント

本山 方子

研究実績の概要

本研究の目的は、幼稚園におけるカリキュラムのデザインと運用の過程について、教育実践の実際に即して検討し、カリキュラム・マネジメントのありようを明らかにすることにある。具体的には、幼児教育の「現実の」カリキュラム・マネジメントはPDCAサイクルのように機能的に展開するのではなく、子どもの姿を眼前にして、園の教育文化や、保育者の教育観、経験に基づく直観などと相まって、遊びの「物語」の創出を伴うノート・ワーキングのように進むであろうことを検討する。

PDCAサイクルは教師行為の一部を総括し、機能づけをする。しかし、実際のカリキュラムのデザインやマネジメントの過程では、保育をめぐる保育者と子どもの営為が複雑な相互関係を為し、保育者の子ども理解や実践の意味解釈、自らの教育観の問い直しなどにおいて、時間的・空間的に複雑で往還的で、時に矛盾も生じる保育者の思考や判断、行為が顕れるのではないか。すなわち、機能的にはPDCAサイクルとして説明可能であっても、その深層には、保育者間の協働によって、遊びの「物語」の創出が随時行われ、それがカリキュラムに関わる営為を連結させる「ノート・ワーキング」となることが予想される。本研究では、「生々しい」カリキュラム・マネジメントの過程について、PDCAサイクルとは別の理論の創出を試みたい。研究の範囲としては、カリキュラム・マネジメントの全方向を取り上げることは困難であり、教育の主軸の一つである協同と思考の側面に焦点化することを予定した。

調査としては、当初、カリキュラム・マネジメントの実際を描くために、月1回程度の頻度で幼

稚園の教育実践を観察し、保育者へのインタビューを重ね、子どもの実際をふまえて検討することを計画していたが、コロナ禍により研究計画の変更を余儀なくされた。実際には、10月中旬から年度末まで、概ね1ヶ月程度の間隔で、現地またはオンライン（Zoom）によって保育者へのインタビューのみ実施した。具体的には、5歳児担任のA保育者に4回約200分、3歳児担任のB保育者に5回約230分を行った。オンラインによる場合は映像・音声記録を採取し、現地調査では保育環境の写真撮影と、ICレコーダーによる音声記録の採取を行った。子どもの様子を参観できないため、協同と思考に焦点化することはせず、その時々保育者の関心や認識、問題意識を捕捉した。

その結果、コロナ禍により、保育形態や行事の実施形態をしばしば変更したり、カリキュラムを修正したりするなど、例年とは異なる変則的なマネジメントがなされていた。学期や年度の単位で見れば、過程は異なっても結果的には子どもの育ちや姿は概ね例年との大きな違いはないと認識されていた。コロナ禍により、かえって、保育や行事、子どもの姿を吟味する機会となり、カリキュラムや実践の抜本的な見直しにつながることもあった。カリキュラム・マネジメントという点では力動的に展開されたことがうかがわれた。